
我が家の愛犬 新之助

シゲさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家の愛犬 新之助

【Nコード】

N8806B

【作者名】

シゲさん

【あらすじ】

大の犬嫌いだった私が、何故犬を飼う羽目になったか。そして、何故か大の犬好きとなってしまった。

子犬、我が家に参上!

平成18年10月1日PM7..30分に成ろうとしていたが、妻と長女はまだ帰ってこない。

当然のことだが、夕飯はできていない。

いらいらしながら、妻の携帯に電話。

「いつ帰ってくるんだ!早く帰ってきて飯の用意しろよ!」

妻答えていわく。

「犬の里親募集の新聞広告があったので、その犬を見に行って今家に戻っている途中との事」

電話してから三十分程度で、妻帰宅。

早速夕飯の支度にかかる。

私は台所に降りていき、妻との会話を保持する為に、儀式的に

「どんな感じの犬だったのか?」と聞くと、

妻答えていわく、

「実はもらってきてしまった」と答え、

いつもと異なる、演技的な申し訳なさうな顔をして私をみる。

とっさに思ったことは、

「妻に、はめられた!」である。

彼女は、犬が大好きで結婚当初から、犬を飼いたいと言っていた。でも、まさかこんな行動に出るとは!

私はあきれてものが言えなかった。

しかし、今回だけは、妻に負けるわけにはいかない。

何を隠そう 私は、犬が大嫌いである。

小学校の頃、犬に追い回されて逃げ惑った記憶。

18歳の時、犬にふくらはぎをかまれたこと等の記憶がよみがえる。

私は、犬が怖くて怖くてしょうがないのである。

そんな怖い犬と、将来生活を伴にする事は、到底考えられない！

今回だけは、妻に負けるわけにはいかない！

過去、幾多の妻との攻防で

正直者の私は、策士の妻にやられて来た。

しかし、今回だけは、妻に負けるわけにはいかない！

仏長顔をして、

「その犬どこにいるんだ」と妻に聞くと

玄関のダンボールの中に入れてあるとのこと。

早速玄関に行き、ダンボールの中に入っている犬を見る。

お世辞にも美形とは言いがたき容姿。体を丸めてダンボールの中で
ちぢこまっている。

私の後を追ってきた妻は、「飼ってもいいか？」と私に聞く。

おばあちゃんも、私と同じく犬が大嫌いである。

おばあちゃんの猛反対する様子が目に浮ぶ。

おばあちゃん怒らしたら、妻とおばあちゃんの格闘も始まる。
大変な難題を抱え込んだものだと思いい心がふさぐ。

「家が荒れるなー」とも思う。

とりあえず、飯だけ食おうと思い、台所に戻った私は
日曜の遅い夕飯を食べ始めた。

生まれて初めて、大嫌いな犬を抱く！（前書き）

大の犬嫌いだった私が、何故犬を飼う羽目になったか。そして、何故か大の犬好きとなってしまった。

生まれて初めて、大嫌いな犬を抱く！

夕飯を食べ終えるやいなや、妻を呼び寄せ

「俺は犬は大嫌いだし、おばあちゃんも犬は大嫌いだぞ！

おばあちゃんに見つかったら大変だぞ。目の玉ひん剥いておこるかなー！

明日もらってきた所へかえせんのか？」と問い詰める。

犬を飼う事を心に決めているのか、

はたまた、結婚後20数年来の夢をかなえるのは、今しか無いと思っ
っているのか、

妻の態度に動揺は見られない。

私の問い詰めなど無視し、そそくさと玄関先の犬を小屋へ移し始める。

我が家の子供達も、犬を見るために、各自の部屋から出て来て、小屋に行く。

台所に取り残された私は、仲間はずれにされた気分。

小屋からは、妻と子供達の会話と子犬のか細い鳴き声が聞こえてくる。

仕方なく私も小屋の方へ移動する。

「お父さんも、いっぺん抱いてみね。可愛いやろう！」と妻は、能天気と言う。

どんな時でも、思慮が足りない。今に始まったばかりでない。

私は、今後の展開を想像すると、憂鬱になる。

そんな気持ちにお構いなしに、再度

「さあ、はよう抱かんかね！」と、子犬を私の胸元に突き出す。

「犬 噛まんやろな。」と言いつつ、身構え、身体に力をいれる私。
「噛まん、噛まん。こんな子犬が噛んだとて、指ちぎられること無いから」と言いつつ豪快な笑い。

妻から子犬を手渡された私は、愕然とした。

軽いのである！

この軽さは、初めて自分の子供を抱いた時の感覚を蘇れせ、思わず

「軽いなー！」と言った。

生き物が持つ温もりが、手のひらから伝わる。

子犬を見れば、私の腕の中で、かすかに震えている。

こういう状況は、苦手である。

こういう状況で、「絶対 犬を飼うな！」言い出しにくい。

今こんな事を言ったら、子供達を含め、全員敵にまわすことになる。これも、妻の策略か？

さらに彼女は、こうも付け加えた。

「今日は、あんたの大好きな死んだおじいちゃん（私の父、平成18年死去）の誕生日や。」

その誕生日に家に来た犬や。犬見るたびに、何年たってもおじいちゃんの事思い出すやろう！

だから今日、あなたに内緒で子犬をもらいにいったんや」と。

見え見えの策略である！

この状況から逃れるべく、早々に子犬を渡し

「一晩、考ええさせてくれ！」と言いつつ、

小屋の2階にある自分の部屋に向かった。

階段を昇りながら、あの子犬の軽さと、腕の中でかすかに震えている姿が頭をよぎった。

それと同時に、勝ち誇る妻の姿も、また、怒り狂うおばあちゃんの姿も頭をよぎった。

子犬、我が部屋で寝る事になる。

蛍光灯のスイッチを引き、起き抜けのままの布団にもぐり込み、初めて抱いた子犬の事を思う。

下からは、妻や、子供達の語らい、

そして時々「クーン・クーン」と言う子犬の泣き声が聞こえてくる。

突然知らない所へつれてこられたためか？

私の腕の中で震える子犬。

可哀想でもあり、意地らしくもあった。

あんなに小さかったら、恐れる事もない様に思え、

おじいちゃんの代わりと思い、大切に育てらそうな氣もした。

一瞬、妻の望みをかなえてやってもいいかとも思えた。

そのほうが、妻や子供達と良好な関係でいられるし。

しかし、もう一人の自分が、

動物でも人間でも子供の頃は、可愛いものさ。

あの子犬が大きくなり、力も強くなった時の事を考えろ。

何かの弾みで野生にもどり、お前に襲ってきたらどうする？

手もつけられんぞ！

俺の指なんて、ひとたまりもなく噛みちぎられるぞ！

相手は畜生だ。

それに、おばあちゃんは、どうする？

85歳まで犬嫌いだったおばあちゃんが、急に変心するとは到底か
んがえられない。

「やめておけ！やめとけ！飼うなんて馬鹿な事考えるのは、止めて
おけ！」と言う。

そんなどうどうめぐりを始めてから、1時間ぐらい過ぎたであろうか？

下から聞こえる声は、「クーン、クーン」と物悲しい泣き声のみになっていた。

妻、子供達は、それぞれ自分の持ち場に戻ったらしい。

結論の先送りは、いつもの事。

明日は仕事だ。

今日は、もう寝ようと思い、寝間着に着替え、部屋の明かりを消す。掛け布団を顔まで掛ける。

寝つきには自信があるのだが、今日はチョット様子が変わる。

眠りの入り口に入ろうとするところで、引き戻される。

「クーン・クーン」と言う泣き声に引き戻される。

そして、そんな事が3回も続くと、

一人きりにされた子犬が、可哀想に思え、

又、ほったらかしにしている妻の態度が、無責任そのものに思えてきた。

もう、我慢できない！

布団から飛び起き、階段を駆け下り、妻のもとへ

「おい、犬が泣いてるぞ！何とかせんか！可哀想やろ！

おまえちゅう奴は、本当に無責任な奴や！

勝手に犬もらってきて、その挙句その犬が泣いてても、ほっぱら

かし。

俺には、考えられん！何とかしろ！」と

大声で怒鳴る。

私の怒りにビックリしたのか？

母親と仲の良い長女（19歳）が、自分の部屋から出てきて、母親を弁護し始める。

「おとうさん！犬は新しい環境になったら、不安と寂しさの為、泣くんだって。

インターネットで調べたら、犬の飼い方っていうサイトにそう書いてあったよ。

お母さんも、犬が泣いているの知ってるよ。でもどうする事も出来ないんだって。

べつにお母さん、無責任じゃないからね！」と

いつの時でも、彼女は、妻と私が喧嘩した時、必ず妻の味方をする。そして、いつもチョッピリ悲しい気分させられる。

涙目になりながら、私のぐうたらな日常生活態度を引き合いにだし、妻の弁護をする。

大声で怒鳴って、チョッピリ気が済んだためか、

予期せぬ長女の反撃にあったためか、攻めの次の手が出てこない。すこすこと、自分の部屋に戻りはじめる。

私の部屋に通じる階段の傍に、子犬がいる。

ダンボール箱の中で、丸まっている。

子犬を見入る。

時々「クーン・クーン」と泣く。

腰を曲げ、そっと 頭をなでてやる。

「俺も、大変だけど、知らない所に連れてこられ、こいつも大変だなー」と思う。

私は、犬に向かい、

「寂しいかー！俺の部屋で寝るかー」と言い、ダンボール箱を抱え上げ、階段を昇り始めた。

子犬、我が部屋でオシッコをする

ダンボール箱を枕元に置き、布団に入り、身を伸ばし、子犬の頭をなでてやる。

やはり、寂しかったのだろう。もう泣く事はなかった。

「人恋しいのは、人間ばかりじゃない。犬も人恋しがるか」と愚にもならない事を思い、眠りにつくために部屋の灯りを消す。

うとうとし始めた頃、手が、「モゾモゾ」する。

何事かと思い手に目をやると、ダンボール箱から出てきた子犬が、鼻をこすりつけている。

再び、眠りから引き戻される。

しかし、今回は冷静だ。

「おいおい、お前の寝るところは、ここじゃないぞー」と言いつつ、子犬をダンボール箱へいれ、再び目を閉じたが、

俺の寝ている間に傍に来て、顔を前足で引掻かれたらどうしようかという不安がよぎる。

爪が目に入り、失明なんてことも考えられる。

かといって、今さら下にもって降りるのもやっかいだ。

迷っていてもしょうがないと思い、

布団から飛び起き、ダンボール箱を布団から1.5メートルほど離す。

そして、何をやっても中途半端な自分らしい結論だと自分自身で納得し、

長い日曜の夜に終止符を打つと同時に目を守る意味も込め、掛け布団を顔まで掛ける。

いつもの私の眠りの中には、ほとんど意識が存在しない。
眠りについたらすぐ朝が来る。

ところがこの日は、違った。

胸のあたりが重苦しい。

タバコの害に恐れつつも、その誘惑に負け続けてる私は、
いつも、肺癌を無意識のうちに意識していた。

そして今、その日が来たかと夢の中で思い、

慌てて目を覚めます。

飛び込んできたのは、胸の上で、お座りしてる子犬。

私の顔を、じっと見ている。

思わず出てきた「あー、あー」の深いため息。

日曜日の夜は、終わっていなかったのである。

子犬に怒ってもしょうがない。

「きつと寒かったのだろうなあ」と思い、

座布団を押入れより取り出し、ダンボール箱へ。

そして、そこに子犬をいれる。

時計を見ると、2時半を過ぎていた。

月曜日の通勤は、時間がかかるうえ、全社朝礼もある。

遅刻する事は、許されない。

「早く寝なきゃ」と思い、

自分の体温で充分あったまってる布団へ、急いでもぎりこむ。
朝までグッスリ寝る意気込みでもぐり込。

そして、そして、深い眠りの中へ。

いつもの起床時間には、まだ早い。
身体が、それを覚えている。

でも、いつもと様子が違う。

「クーン、クーン」と言う声が聞こえる。

部屋に連れ込んでる子犬の事は、どこかに飛んでいる。

眠い目をこすり、声のするほうに目をやると、

部屋の入り口に子犬がいる。

その足元は、濡れている。

記憶は、よみがえる。

初めは、ゆっくりと。

「あー、昨日部屋に子犬つれてきたんだっけ」

そして 徐々にスピードをあげる。

「又ダンボール箱から抜け出したのか。眠い！もうほっとこう」
そして、最後はフルスピードで。

「何故、足元濡れてるの？この部屋に水けの物ないはずだけど。ま
さか オシッコ？

いや、確実に オシッコだ！ ああーどうなってんじゃ！
大変だ、大変だ！ 紙、紙、紙！ はよう ふかにゃ！」

布団から飛び起き、ティッシュを探すが見当たらない。

あせって、落ち着いて探す余裕がない。

紙なら何でもいいと思い、

近くにあった新聞紙を手に取り、オシッコを拭き始める。

「手にオシッコが付き汚い」なんて思う余裕はない。

でも、新聞紙は、なかなか吸い取らない。

「これじゃ、らちがあかん！」と思い、

トイレトペーパーを得んがために、階段を怒涛の勢いで駆け下りる。

トイレに行く途中にある台所に妻がいた。そこに彼女がいると言うことは、時刻は6時頃か。

どうも昨晩は、娘の部屋で寝たみたいだ。喧嘩した時は、いつもそうだ。

その妻が、昨日の事は忘れ、

「どうしたの？そんなに急いで」と私に聞く。

本当にいつも呑気な奴だと思う。

「犬が、俺の部屋で小便たれたー！俺は馬鹿じゃった！犬が小便する事わすれてたー！

はようふかにゃ、小便が畳の中に入ってしまう。トイレトペーパー取りにきたんじゃ」

と言い放ち、トイレに向う。

一卷取るやいなや、再度我が部屋へ。

朝、玄関先での妻との会話

出勤前玄関先で、

「おばあちゃんに見つからぬようにしろよ。犬を小屋に置くのはだめだぞ！」

おばあちゃん小屋によく行くからなー」命令調で言えば、

「そんな事解ってる。子供の部屋に置くつもり。犬が泣けば私にも聞こえるし」と答える。

「犬の泣き声がおばあちゃんに聞こえたらどうするんだよ」と聞くと、

「大丈夫、野良猫が外で泣いたと答えるから」と言う。

確かに、我が家の周りに野良犬はいないが、野良猫はいる。

その野良猫、時々玄関の戸を開けて我が家に入ってくることもあるのだが、

「犬と猫では泣き声が違うだろ」と言うのと、

「大丈夫、おばあちゃんにとって、犬と猫の鳴き声の区別つかないって。」

私に任せておきなさい。」と自信満々である。

結婚生活二十数年も経つと、結婚当初の面影は、忘却のかなた。

妻は、思慮なく大胆であり、そして思慮なく嘘をつける女に変身していた。

こんな事があった。

結婚十数年たったある日、私は彼女の体型に異変を感じた。

そこで

「最近、太ってきてないか？結婚した時の約束、絶対太らないという約束 覚えているだろうな！」

と聞くと、

「全然太ってないよ！ただ、お肉の付く場所が、年取ってきたから、変わってきただけよ。」

だからそう見えるのよ。ヘルスメーターの指示は全然変化なし。でもちよつとトレーニングしたほうがいいかな。

通販で安いトレーニング機器があるんだけど買ってもいい？」
としおらしく聞く。

太られるより良いと思い、購入を認めるが、

妻がトレーニングしているのを見たのは、2，3度。

その機器は我が家にもうない。廃品回収行きである。

妻にその事を問い詰めると、

笑いながら答える。

「やる気はあるんだけど、他の人と比べて私の心臓が小さいらしいの。」

昔診てもらったお医者さんが言ってた。だから身体に悪いと思って止めたの」と

大いなる嘘である。

最初から、あまりやる気はなかった。

そして、笑いながらこの様な嘘をつける妻の心臓が小さいはずがない。

そんな妻が、私をせかす。

「さあ、さあ、早くしないと会社遅れるよ！携帯持った？お金持った？」と言いなながら。

まるで、私は、妻の子供である。

しかし、私は、亭主である。叶わぬ亭主関白を目指す亭主である。威厳を保たねばならぬ！

「犬を飼う事認めたわけでないからなー。おばあちゃんに見つから

ぬようにうまくやれよ！

それから、犬のオシッコとウンチには気おつけろ！大変なことになるからな！」

と妻に指示するが、

「解ってる、解ってる！それより服のボタン外れてるよ」と軽くなされ、家をでる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8806b/>

我が家の愛犬 新之助

2010年10月23日08時04分発行